



Title	シモーヌ・ヴェイユにおける不幸の形而上学
Author(s)	澤田, 愛子
Citation	北海道大学医療技術短期大学部紀要, 2: 33-42
Issue Date	1989-11
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/37503
Type	bulletin (article)
File Information	2_33-42.pdf



[Instructions for use](#)

シモーヌ・ヴェイユにおける不幸の形而上学

澤田 愛子

Metaphysics of <le Malheur> by Simone Weil

Aiko Sawada

Abstract

In this paper I analyzed the metaphysics of <le malheur> by Simone Weil who is very famous lady philosopher of France. <le malheur> is her central idea.

At first I'll show you an outline of her life which is helpful for an understanding of her ideas of <le malheur>. After that I'll tell you metaphysics of <le malheur>.

She said that <le malheur> is not simple suffering but an external crush of anima by blind necessity. This means also that our life is rooted out physically, mentally and socially. We can't understand it clearly. It has very severe contents. In a word it makes persons things (des choses) by depriving thinking ability from persons. But if we use it well, it leads us to the truth and becomes a method of saving oneself and others. It is necessary that the spiritual part of anima is well preraratosy for this aim.

The Cross of Christ is the best model for good use of <le malheur>. Thus <le malheur> becomes the door which leads us to the grace of God.

要 旨

本稿は、フランスの女性思想家として名高きシモーヌ・ヴェイユの形而上学的中核思想である不幸論をまとめ上げたものである。まず前半では、不幸論を形成するに至った背景として、彼女の歩みを簡潔に述べ、その後不幸の形而上学を展開する。

彼女によれば不幸 (le malheur) とは単なる苦悩とは異なり、盲目的必然性によるところの魂 (人格) の外的粉碎であるという。これは肉体的、心理的、社会的に人生が根こそぎにされることでもある。不幸は明確な認識が困難なほ

ど、すさまじき特長をもつ。一言でいえば人間から思考力を奪い物化することであろうか。けれども用いようによっては、真理への橋わたしとなり、自己と他者を救う手段ともなってくれる。その為には魂に内在する靈的部分が、恩恵の光のもと、よく準備されている必要がある。キリストの十字架は不幸の善用と真理のよきモデルであった。こうして不幸は恵みに通じる門となったのである。

はじめに

シモーヌ・ヴェイユ (Simone Weil 1909—1943 年), 20 世紀前半を生き抜いたこのひとり

の強くて心暖かい女性の生涯は、戦乱の道を歩いていた人類に、暗夜に輝く一条の光でもあった。人間同志が憎み合い殺し合っていた時代に、ヴェイユは他者の不幸に心を痛み、その生来の共苦 (compassion) の心をもって、ひたすら他者の苦悩を分かちもととしていた。常に不幸な人々の直中に身を置き、その中で心身を磨り減らしながら、生きて死んでいったその姿に、偽りの影は少しもない。彼女の放つメッセージが、常に人の心を捕えて離さぬのは、それが生々しい生活体験に色づけられているからである。そのメッセージは、苦悩せるすべての人々の心を貫通せずにはおれない威力を放つ。そしてその貫通された心の向こうに、我々は光を覗いたのであった。それは不幸の夜には、必ず光の朝の訪れを告げ知らせるものでもあった。この哲学の若いアグレジェ (教授資格者) は、他者の不幸への共感を自己の中で召命 (vocation) にまで浄化し、真理へのひたむきな愛と実践を通して、味わい消化し、ついにひとつの意味にまで高めたのである。

人類は有史以来、常にひとつの大きな問題に直面してきた。それは善意の人に降りかゝる突然の不幸の問題である。真面目に生きている人を襲う災難の数々。例えば大病、自然災害及び人工災害等々による生命の切断。そして一家の離散。罪なき子供達を襲う飢餓。善意の誤解による社会的失墜等々。何故かゝる不幸が許されるのか。そして何故この私に、と人は悩む。しかし答えは出てこない。キリストの十字架は、この問題と関連して、ひとつの大きな神秘である。キリストが神であるのなら何故に又、あのような死に方をしたのか。神の子キリストは、何故父なる神より見捨てられ給うたのか。神が神を見捨てるということが、いったいどうして起こり得るのか。この問題は有限な人間の理性を越える神秘として残る。しかしそこより目を反らせば、人生から貴重な意味をもぎ取ることになりはしないのか。ヴェイユの短かくも壮烈

な生涯と思想は、生涯、この問題を追求してゆくことの重みを示しているように思われる。世に幸福論の多き中、彼女の不幸論は貴重でもある。それは結局、^{まこと}真の幸福を深部より追求したものとて、以下にヴェイユの不幸論を展開してみたい。まずその思想誕生の背景となった彼女の足跡を辿った後に、不幸の形而上学 (méta-physique du malheur) に入ってゆきたい。それは苦悩せる多くの人々に必ずや希望と生きる勇気を与えるはずである。

I. シモーヌ・ヴェイユの歩み

—— 不幸な人々の直中で ——

彼女の生涯を要約すれば、お、よそ次のようになるであろう。ボワデッフルは述べている。『彼女は哲学教師となり、サンディカリストの闘士となり、女工となり、スペイン国際義勇軍の戦闘員となり、農婦となり、自由フランス事務局員となって、世界の不幸をみつめることを一度も中断せず、殉教に至り、死に至るまでその不幸を自分の肉体に引き受けた。』¹⁾

しかし不幸の思想の形成という視点よりみれば、彼女の生涯は、前半の形而下的な不幸の体験期と、後半の形而上学的な不幸の反芻期に分かれるように思われる。そしてこの反芻期に、積み重ねられた実践より出た思想は骨格を形成してゆくのである。とは言うものの、この時期に彼女は思索にばかり耽っていたのではない。彼女の召命意識にまで高められた共不幸の生来の傾向をもって、相変わらず活発に活動を展開していたのであるが、それは深い内省と、十字架の瞑想によって一層内的な意味を帯びたものになっていた。つまりキリストの十字架の秘義に照らされた結果、人間の不幸がより深い意味をもって、彼女の後半の活動を支えたのである。

シモーヌ・ヴェイユはその女工生活の体験において、それまでは観念の世界にあった他者の

不幸が、初めて自己の肉体と魂において受肉化するのを体験した。1930年代前半の劣悪な労働条件下にあったフランスの工場。そこに一女工として身を投じ、労働者の不幸を共有した結果、彼女は不幸の虜^{とら}となってしまう。哲学教師の職を捨て、工場街に小さな部屋を借りて移り住む。それまで許されていたすべての特権を排除し、労働者と同一条件に身を置きつつ彼等に徹底的に同化しようとした結果、当時の労働者の悲惨^{ミゼラブル}が残らずヴェイユの体と魂に染み込んでいった。生来の無器用さと時々襲いかゝる激しい頭痛にもめげず、彼女は懸命に働いた。疲労の為に体がもはや動かなくなる時、全身に響く上司の怒鳴り声、権力者の意のままに振りまわされる労働者のあわれな姿、そして家路につく時の彼等の黙し切った悲しげな顔々、彼女はそのひとつひとつを心に刻みつけた。そこには思考力が麻痺し屈辱が支配していた。

彼女は十箇月の女工体験を通して、自分の身と心が粉々に砕けてゆくを感じ取っていた。まるで踏み潰された虫けらのようだ。このまゝでは再起できない。疲労困憊の心身を休めようとヴェイユは、工場生活の後、教職に復帰するまでの間、ポルトガルを旅行した。ある晩、貧しい漁村の浜辺に佇んでいた時、心の底まで染み通る光景をみて感動する。時は丁度、村の守護聖人の祭りの夜であった。女達はろうそくを手に、行列をつくって、「非常に古い聖歌を、胸を引き裂かんばかり悲しげに」²⁾歌いながら、小舟のまわりを回っていた。その時彼女は突然「キリスト教とはすぐれて奴隷達の宗教であることを、そして奴隷達は、とりわけ私はそれに身を寄せないではおられないのだ。」³⁾という確信を得たのである。工場生活の体験は、いわば奴隷^{ミゼラブル}のもつ悲惨さを彼女に分ち持たせたのであったが、その心に貧しい女達の悲しみと疲れが、驚くべき共感をもって染み通っていったのであろう。悲しみに満みた調子で聖歌を歌う女達の

姿の中には、まさに自分の力といえるものはないが為に、すべてを他者に依存せざるを得ない人の、一方では奴隷的な、もう一方では他力に生きる信仰者としての二重の姿を読みとることができる。ここには単に社会体制の変革のみでは解き放たれぬ人間の根源的な悲しさが宿されているように、ヴェイユには思われるのであった。彼女の女工としての不幸の体験は、今や労働者の不幸という具体例を通して、人間の不幸の本質を見つめるところにまで、彼女を深めていったといってもよいであろう。

シモーヌ・ヴェイユはその後スペイン市民戦争（1937年7月勃発）への参加を通して、さらに共苦の体験を深めてゆこうとした。しかしこの内乱への参加は、彼女にとって決定的な挫折をもたらしたのである。彼女はそこで、今まで弱者の味方であると信じていた人々の裏切りを知った。この戦争はもはや飢えた農民の、地主や共犯の聖職者階級に対する復権運動ではなかった。現実には社会主義革命の様相を呈していたし、さらに抽象的な国家間の威信戦争にまで発展していた。ヴェイユが何よりも心を痛めたのは、弱者の味方であると思われていた人々の理由なき殺傷行為であった。ここでは殺傷行為が食事時の自慢話にすらなった。そこにはもはや恥らいも良心の呵責も無い。ただあるのは人間不在のイデオロギー闘争のみであった。ヴェイユは実際には、大火傷の故に戦乱の大部分を病院で過ごしたのであったが、この期を境に、革命集団から離れてゆくことになる。即ち彼女はここで、この種の集団の独善性とイデオロギーのもつ虚構性に覚醒したからである。ヴェイユは苦悩した。心の中には如何ともし難い挫折感があった。工場体験によって他者の不幸に打ち砕かれた彼女は、このスペインでの挫折により、もはやどうにもならぬ人間の弱さと悪の問題に、その政治的信念を打ち砕かれてしまったのである。

彼女はスペインから帰国後、空虚な心で、しかし一方では求道心も秘めつつイタリアを旅行した。そしてポルティウンクラの礼拝堂で、何かの強い力に促されて、生まれてはじめて跪いたのである。翌年ヴェイユはソレムにあるヴェネディクト会修道院で聖週間を過ごし、すべての聖務に参加した。その時彼女は激しい頭痛に悩まされていたが、「非常な努力をして注意を集中した結果、この悲惨な肉体の外に逃れることができ、肉体だけはその片隅に押しつぶされて勝手に苦しみ、歌と言葉のこよなき美しさの中に、純粹でしかも完全な喜びを見出すことができた」⁴⁾のであった。この体験は「不幸を通して神の愛を愛することの可能性」⁵⁾を彼女に示唆するものであった。これは彼女の不幸論を形成してゆく上で重要な出来事であった。この時彼女の中には、キリストの受難の思想が決定的に入り込んできたという。

その後、ヴェイユは第二次大戦に突入してゆく重大な事局の中で、ますます求道的な道を辿るようになる。1940年6月14日、パリ陥落の悲劇の中で、ヴェイユ一家はマルセイユに落ちのびる。そこで彼女は生涯の師となるドミニコ会師のペラン神父と出会うのだが、この出会いは彼女のカトリシズムへの接近を決定的なものにした。祖国が占領されるという悲運の中で、彼女は不幸の問題を、さらにキリストの光の中でみつめ続けていくようになる。内的な光は外貌を照らして、その頃のヴェイユを友人のG. ティボン（注1）は次のように語っている。

「彼女がローヌ川の谷間をじっと眺め入って動こうとしないでいるさまを目にすると、この尊敬の思いはますます募るのだった。……その目の強い光と澄んだ清らかさとは、彼女がその足もとに開けたみごとな地平線と同時に、内側の深い湖をも見つめていたからなのだ。」⁶⁾

シモーヌ・ヴェイユの心の中に、今や不幸に対する解釈は明確な輪郭を取るようになっていた。

II. 不幸の形而上学

では彼女の中に輪郭を取り始めた「不幸」の思想とは、如何なるものであったのか。いよいよ本稿の中心テーマに入ってゆかねばならない。1942年5月、激しい戦火の中で、ヴェイユ一家はアメリカに亡命することになる。この時同行したことをヴェイユは後程激しく後悔することになるのであるが、出発に際して彼女は心の友であるペラン神父に、一論文を手渡している。それは「神への愛と不幸」(L'amour de Dieu et le malheur) と題する論文であった。ここには彼女の不幸に関する思想が驚くほど美しく集約されている。これを中心に、又同時に他の友人達が後に出版した数々の著作集等も参考にしつつ、ここにヴェイユの不幸論を展開してみたい。

1. 不幸の成立条件

シモーヌ・ヴェイユにとって「不幸」(le malheur) とは、特別の意味を有する言葉であり、「単なる苦しみとは、全く別のものである。」⁷⁾とされている。それは盲目的必然性 (la nécessité aveugle)、又は「周囲の状況の機械的な粗暴性による魂の粉碎なのである。」⁸⁾

ではいったい「魂の粉碎」とは如何なることなのであろうか。それは肉体的及び心理的のみならず、社会的にも不幸を被る人間の人生を根こそぎにする (déraciner) ことなのである。この心理的、肉体的、社会的根こそぎこそ、彼女のいうところの「不幸」を成立させる三条件といってもよいであろう。彼女は述べる。

「ある生命を捉えて、根こそぎにした出来事が、直接的にか間接的にか、社会的、心理的、肉体的に、その生命のすべての部分に達している時にのみ、本当の不幸があるともいえる。」⁹⁾

そしてこの三条件の中でも、とりわけ重要なのが、社会的な失墜 (déchéance social) であるとヴェイユは考えていた¹⁰⁾。なぜなら社会から

見捨てられるという条件こそ、人間性を徹底的に貶めるものであるからである。

では次にこうした魂の粉碎をもたらす不幸の性格について、もう少し詳しくみてゆきたい。

2. 不幸の特質

まず銘記せねばならぬのは、不幸の状態記述がかなり困難であるということである。なぜなら不幸な人間は、自らの不幸を省察することが、ほとんど不可能であるという。ヴェイユは自らの女工体験によって、そのことを痛感していた。彼等は自らの「立入禁止地帯」(des zones interdites)¹¹⁾を形成し、そこに閉じこもり外部に姿を顕わすことがない。同様に外部の人間も不幸を考えることが困難である。不幸は悪であり¹²⁾、人間の本性の欲求に反したことからである¹³⁾。ヴェイユは語る。

「生きた肉体が死を厭うのと同様に、思考は不幸について思い巡らすことを厭うものである。(中略)現実の全く身近かなある不幸におちいらなくて済む人が、注意深く見守る態度を取ることとは、まず不可能なのである。」¹⁴⁾

従って不幸な者もそうでない者も、同時に不幸から思考を逸らしているものであり、何ひとつ明確な表現は取り得ない。しかしまさにこうした状態こそ、ヴェイユによれば、不幸を最初に特徴付けるものとなる。その結果、不幸な人々は虚偽の中へ逃げ込むのである。

「周囲の状況に強制されて、不幸に直面させられた思考は、死への危険に脅かされた動物が、目の前に開かれた避難場所に飛び込むように、すばやく虚偽の中へ逃げ込むのである。」¹⁵⁾

その「避難場所」で不幸な人々は、一見起伏のない無気力ともみえる生活を営んでいる。「不幸がある点にまで達すると、不幸が続くということにも、そこから解放されるということにも、耐えられなくなる。」¹⁶⁾のである。

けれども一端、不幸より解放されるや、人は過去を振り向くこともせず、一目散にそこより

逃げ去ることであろう。しかしその時、振り向く勇気をもつ人々にのみ、不幸の認識は可能になるという。

ヴェイユはまさにその勇気をもつひとりでもあったのだ。彼女は自らの体験と省察をもって、この「島」¹⁷⁾に閉じ込められた人々の魂の状態を分析してゆこうとする。虚偽で被われているその魂は、恐怖感¹⁸⁾、自己嫌悪(dégoût)と罪悪感(sensation de culpabilité)¹⁹⁾、無気力(inertie)²⁰⁾、無関心(indifférence)²¹⁾、「集中と持続に対する完全な無能」²²⁾で占められることになる。

ヴェイユはこれを工場生活の中で感じ取っていた。人々は屈辱と倦怠の中で、ただ動物のように上司の命令を受けて、うごめくだけであった。そこには人間らしい創意工夫はもちろん、自分達の境遇に対する怒りすらもみられなかったのだ。このような状態は、必然的に人間を考えぬ動物、即ち物(des choses)にしてしまうという。そしてこの「物化」は、工場内では明白に感じ取られることでもあった。そこでは主役は機械であり、もはや人間ではなかった。

「物が人間の役割を演じ、人間が物の役割を演じている。これが悪の根なのだ。」²³⁾

「物」は他方匿名(anonyme)の状態への通路ともなり得る。「不幸は本質的に人格を減ぼすものであり、匿名への通路である。」²⁴⁾そしてこの匿名こそ、人間関係の喪失をもたらすことになる。何故なら物でもあり、匿名でもある二人がそこにいたとしても、隣合った二滴の水滴のように、相互に対して如何なる意味をもつものでもなくなるからである。不幸な人々は黙し、他に関心を示さない。もしもそこに人間関係が結ばれ、友情が芽生えたとしたら、「超自然的な愛」(l'amour surnaturel)²⁵⁾の働きによる以外のものではないとヴェイユは考える。この人間関係の喪失こそ、まさに不幸な人々をして、社会的失墜へと導く根源になるのである。そして社会的失墜をした人は、当然ながら常に孤独で

ある。

—— 魂の状態と不幸 ——

ところでこうした人格破壊に会った魂は、もはや次のようにしか叫ぶことができないという。即ち、

「何故私は災いを受けるのか。」²⁶⁾

この言葉は、魂の汚れを知らぬ奥深い部分より発せられた叫びである。この部分はヴェイユによれば、一方で「無人格的部分」(la part impersonnelle)、又は「超本性的部分」(la part surnaturelle)とも称せられ、如何なる人間においても生まれながらに備わっている靈的にして、非創造 (incréée) の一点である。これは愛と正義と真理に属し、ただ神の為に働く故に、人間において、尊敬に値する唯一の点である。ヴェイユにおいては、「無人格」(impersonnalité) と「超本性」(surnaturalité) は同義であり、魂におけるその宿る部分は、人間を真理へと導く唯一の橋 (metaxu) として重要概念を形成している。不幸によって人格 (personnalité) が破壊された今、魂の無人格的部分が表出して、この言葉を言わしめたのだという。

一方人が、「何故あの方は私よりも多く持っているのか」²⁷⁾と発する限り、その人は未だ不幸には至っていないのだとヴェイユは語る。何故ならその言葉は魂の人格的部分 (la part personnelle) 又は本性的部分 (la part naturelle) が言わしめているからである。人格的部分は人間の本性そのもの、ないしは自我 (le moi) そのものともいえ、権利と所有に属している。自我は常に自己主張を繰り返し、我々の内部にあって錯誤や罪の基となる²⁸⁾。従って不幸が人格 (自我) を破壊するものである限り、こうした叫びは、人格の健全さを意味する故に、不幸の表明とはならぬのである。

人間が真理と善、即ち神の在します方向に導かれる為には、まず人格 (自我) が砕かれ、魂

の光の一点 (無人格的部分) が働き始める必要がある。それは自己放棄 (renoncement de soi-même) による神への回帰とも呼べるものであろうか。ところでこの自己放棄に役立つのがまさに不幸であるともいえるであろう。幸福な時、自我を砕くのは容易なことではない。しかし外的な魂の破壊なる不幸は、確かに自己放棄を促進せしめる。ただしそれは魂の靈的部分が恩恵 (grâce) の光のもとに、働き始める場合に限られる。魂のこの部分は非創造の故に、不幸によっても砕かれることがない。砕かれなどころか、恩恵の力によって、それに同意さえして、人間を真の救いへと導くのである。ここにおいて、暗黒の不幸の向こうに光が見え始めてくるのを感じる。即ち魂の破壊が実は、恩恵を通して神への道となるのであった。

ところで今、不幸を神の為に善用できるのは、魂の靈的部分が働くことが条件であると述べた。ではヴェイユが人間の魂にアプリオリに与えられているとしたこの部分は、最初は機能しないのであろうか。多様な文献からはそのように読める。だから人は常に恩恵を求め、魂を準備することが必要となるのである。まだ準備が整わぬ人に不幸が襲った場合には、人格の破壊は恐ろしい結果をもたらすことになる。ヴェイユは語る。これは真の地獄である。だからできる限り不幸は避けねばならぬのである。

しかし次に魂の靈的部分が機能し始めている人々に不幸が襲った場合、この苦しみは自己の罪を償うもの (la souffrance expiatrice) となってくれる²⁹⁾。この時魂は外的破壊に加え、靈的部分の不幸への同意による魂の二分分裂を体験するわけで、それはすさまじき苦痛であるとヴェイユは語る。外的破壊による一次的苦痛よりも熾烈をきわめる。しかしこの苦痛が償いの役割を果たすのである。自我は如何にしても不幸に同意はできぬ。そこへ靈的部分が同意をなすのである。この不同意と同意の分裂が、魂を引き裂き、苦痛の底へ落としめてゆく。

—— 真空に耐えること ——

最後に非常に稀有な場合であるが、恩恵によって不幸以前に、自己放棄を完全になした魂に不幸が襲った場合を想定してみよう。その場合の苦痛は、贖いの役割を果たす (la souffrance rédemptrice) とヴェイユは述べる。もはやそこには破壊される自我はない。けれども不幸は完徳の域においても、自我の外的破壊に等しい結果を生み出すのである³⁰。それは神の不在であり、そこより激烈な苦悩の叫びが発せられる。

「わが神、わが神、どうして我を見捨てられ給うたのか。」 (Mon Dieu, mon Dieu, Pourquoi m'as-tu abandonné ?)³¹

これはキリストのゴルゴタの丘の叫びであり、この時人間の不幸は、キリストの十字架の秘義に参与するものとして、贖いの意味を帯びるようになるのである³²。しかしこの叫びに対して、返ってくるものはただ沈黙 (silence) のみ。これは宇宙に合目的性 (la finalité) が欠如している結果であり³³、不幸の故にこれを求めて叫び続ける魂は、やがて「真空」 (le vide) に触れるであろう³⁴。けれどもこの真空こそ、我々を真理 (la vérité) へと運び去る穴となるものなのである。

3. 不幸を通して真理の光へ

人は不幸に陥った時、「何故この私が」と考える。しかしこれに対して如何なる答えもないこと、これがヴェイユによれば「真空」であった。それはまさに苦悩の「暗き夜」 (la nuit obscure)³⁵ (注2) に他ならない。しかし魂はこの暗き夜にあって、不条理に同意し、ひたすら神への回帰の旅路を続けねばならぬのである。その時必ずや我々は真理の光を見ることになるであろう。その為には、真空に耐えることと、愛し続けることが肝要であるとヴェイユは考える。これは不幸を善用する為の必須条件であり、以下にその各々について説明を試みてみよう。

盲目的必然性がもたらす不幸、それ自体は悪である。神はこの宇宙を盲目的必然性の支配にゆだねられたとヴェイユは語る。すべてのものはその支配より逃れられぬ。光輝く朝に、そよ風に揺れる木々の梢、嵐の夜のたけり狂う海、暑い夏に乾いた大地を這う蟻の大群等々、宇宙の法則性より逃れ得るものは何ひとつとしてない。けれどもいったん、我々の目を時間と空間の外側に移すや、盲目的必然性は神の意志 (la volonté de Dieu) への信従行為となるのである。それ故に世界は美しいのだとヴェイユは考える³⁶。人間もこの必然性の支配から免れ得るものではない。ただ一点、他と異なるのは、人間に与えられた同意の能力である。必然性 (神の意志) への信従を同意するか否か、選択権は人間にある。それはひとえに神の愛のなせる御業でもあったのだ。けれどもたとえ同意せぬとも、人間は必然性の法則から逃れ得るものではない。

この必然性の織りなす結果が不幸であった場合、それへの同意と信従が如何に困難かは既に述べた。不幸は普通の苦しみではない故にである。けれどもいったん同意を果たすや、激しい苦痛と共に、真理の地平が開かれてくる。即ちあの魂の無人格の聖なる部分の能力である。けれども同意をせぬ場合、それは単に盲目的メカニズムに翻弄される物質とは変わるところがない。人は不幸のどん底で「何故」を連発する。しかし如何なる応答も返ってはこない。人はこの時存在 (existence) に穴があいたように感じる。つまり真空である。けれども真理の光が差し込むのは、まさにこの穴を通してなのである。人の発する「何故」への沈黙こそ、我々の目を必然的に時空の外に、即ち真理にして実在の在します王国へと遣ることになる。こうしてこの穴は真理への「^{メタクシス}橋」³⁷ となってゆくのである。

従ってこの時、我々は何よりもこの真理への

橋なる真空を、慰めや空想等によって埋めてしまわぬことが肝要となる³⁸⁾。これは換言すれば、不幸への同意に他ならない。この穴を埋めてしまえば恩恵の光も閉ざされる。けれども本当にこうしたことが人間に可能なのであろうか。真空に即ち応答無き沈黙に耐えることが可能なのか。それは我々の本来の性向に反する。苦しみの時、我々はそこに意味づけと慰めとを必死に求めようとする。即ち沈黙ではなく解答を求めて焦慮する。こうすることで、かろうじて苦痛に耐えるのである。けれどもこれでは真理に至りつけぬとヴェイユは語る。何と厳しく苛酷な思想かと思われる。しかし真理は人間の安易な想像を寄せつけぬ。神は想像をはるかに越える御方なのだ。沈黙の中にこそ真理が存在する。それを埋めずに待つこと、それは死のような苦悩である。だからこそこの種の苦悩は、既述した償いと贖いによる自己と他者の救いへと導いてくれるのである。

「真理を愛することは、真空に耐えることを意味する。そしてその結果、死を受容することを意味する。真理は死の側にあるのだ。(La vérité est du côté de la mort)」³⁹⁾

—— 愛し続けること ——

しかし不幸の夜が完全に輝く朝を迎える為には、真空に耐えることのみでは足りぬとヴェイユは迫る。その為にはもうひとつの条件、即ち苦悩の恐ろしい夜にあって、愛し続けることが肝要なのである。少なくとも愛の姿勢を保ち続けること、そして不在と感じられる神に視線を向け続けることである。次のヴェイユの言葉は何と我々の胸に響くものであろうか。

「不幸の為にしばらくの間、神が隠れてみえないことがある。(中略)魂全体が何かぞっとするような恐ろしさの中に浸されている。このような不在の時には、何ひとつ愛するものがない。何より恐ろしいのは、こうした暗夜にあって、

もし魂が愛することをやめるならば、神の不在が決定的になるということである。魂は空しく愛することを続けるか、少なくともせめて魂のごくわずかな部分においても、愛しようとの願いを持ち続けるかしなければならぬ。こうしてある日、神がみ姿をあらわし給い、世界の美しさを教えて下さる日がやってくる。丁度ヨブの場合のように。しかしもし魂が愛することをやめれば、魂はこの世にあって早くも、地獄に等しい状態のうちに落ち込むのである」⁴⁰⁾

ここで不在の神を愛し続けるということは、暗闇のうちにあって真理への姿勢を保持し続けることでもあり、一方では不幸への同意の持続でもある。

こうしてやがて愛し続ける魂は、真空の穴を通していや増す真理の光のもと、実在なる神との離れることなき一致へと導かれることであろう。

この終局に導かれる為にも、人は魂のあの輝く一点を一層強めねばなるまい。しかし自力ではかなわぬ故に、恩恵の光をひたすら待ち望むことが肝要となるのである。

4. キリストの十字架

ところで不幸のこの役割を最高に示し得たのが、キリストの十字架であった。キリストこそ、受難 (la passion) という不幸にあって、真空に耐え、ひたすら不在の神を愛し続けた最良の模範である。

キリストはまず不幸な人であったとヴェイユは語る。何故なら彼は名誉ある殉教者として死んだのではなく、一般の法律である刑法犯として死んだのだ。罪なき神の子が刑法犯として殺されたところに、不幸があったとヴェイユは考える。従って不幸にあって、真理と愛の在します方向に眼を向け続ける人には、このキリストの痛ましくも美しい受難の調べが聞こえてくることであろう⁴¹⁾。

受肉した神のみ言葉なるキリストには、父の

意にそむく自我など存在しようもなかった。従って受難においてその人性が如何なる苦痛に引き裂かれようと、神性は御父への同意に貫かれていた。

「我が父よ、もし可能ならば、この杯を我より取り去り給え。しかし我が意のままにはなく、御心のままになるように。」⁴²⁾

こうして苦悩の叫びは同意に吸収され、その同意が、我々に神を取り戻させたのである。ここにおいて、人間の傲慢の犯せる原罪(le péché originel)は許しを受け、その苦難によって我々は真の自由へと贖われたのだ。キリストを貫いた十字架の釘は、神と魂を分かち厚きとぼりを貫いて穴を穿ち、我々に神を戻す手段となった。

「釘を打ち込まれても、じっと神の方へと向けられた魂を持つ人は、いわば宇宙の中心に釘付けられているのである。それこそ真の中心であって(中略)、空間と時間の外側にあり、神そのものである。(中略)この驚くべき次元の故に、魂は自らがつながれている体の今ある場所と時間を離れることなく、空間と時間の全体を横切り、神の現存の前に至りつくことができるのである。」⁴³⁾

実際に不幸はキリストの十字架の後に、神に導く手段として意味を帯びるようになってきた。不幸による失意のどん底にあっても、愛のうちに耐えている人々には、受難の調べが聞こえてくることであろう。その時より人は、もう如何なる疑惑にも捕えられることはない⁴⁴⁾。今やキリストの模範によって不幸は照明を受け、不幸な人には真の慰めと平安が約束されるようになったのであるから。

彼は……我々の不義の為に
砕かれたのだ。
彼は自らこらしめを受けて、
我々に平安を与え
その打たれた傷によって
我々はいやされたのだ⁴⁵⁾。

「不幸を照らす為に、充分明るい唯一の光源は、キリストの十字架である。どんな時代であろうと、どんな国であろうと、ひとつの不幸が存在するところならばどこでも、キリストの十字架が不幸の真理である。」⁴⁶⁾

おわりに

シモーヌ・ヴェイユは、1943年8月24日、イギリスのサナトリウムで死んだ。享年34歳。彼女の死の前の一年を如何に説明したらよいであろうか。彼女は自己の中にかみ砕いた不幸の奥義を、徹底的に生き抜いた。共不幸の願望は、恐ろしいまでに熱を増していた。彼女は戦乱のフランスを離れたことを罪のように感じていた。かの地で苦しむ人々を置き去りにして、今自分はこの安全地帯で生活をしている。こうしたことは許されることではない。かの地で苦しむキリストを見捨てて、暮らすことなど、どうして許されよう。彼女はフランスに戻って、レジスタンス活動をすることを熱烈に希望する。しかしその願いは最後まで聞き入れられなかった。その願望が絶望にかわるにつれて、空間的に離れているにせよ、かの地で苦しむ人々の苦悩をせめて分かち合う為にも、ついに食物までもとらなくなってしまった。それはまさに狂気に近かった。しかし愛の狂気である。まさしく彼女の一生は愛の狂気の燃焼であったのだ。

シモーヌ・ヴェイユは孤独の中で死んだ。キリストのように如何なる武器ももたずに、裸のまま、で。「ただ心の中に燃え立ちし光のみに導かれて。」⁴⁷⁾

注1 …G.Thibon, フランスの百姓哲学者といわれている人である。1941年ヴェイユはペラン神父の紹介で彼のところで農作業を手伝うことになった。この時よりティボンとヴェイユの交流が始まり、彼はヴェイユの見識の高さ、深さにいたく感動したといわれている。後に出版されたヴェ

イユの著作は彼の編集になるものが多い。

注2…ヴェイユにおける「暗夜」の概念は、16世紀のスペインの神秘家十字架の聖ヨハネ (San Juan de la Cruz) による『暗き夜』(la noche oscura) の影響を強く受けたものである。彼女はこの聖人を熱愛し、その形而上学思想にはヨハネの影響を随所にみることができる。即ち神秘思想の影がそこにみられるのである。

引用・参考文献

(注：同名書の引用、参考文献は2回目の呈示より、著者名と書名、ページ数のみを記し、後の記載は省略することにする)

- 1) 大木健：シモーヌ・ヴェイユの不幸論，p. 5，勁草書房，東京
- 2) Simone Weil : Attente de Dieu, p. 42, 1966, Fayard, Paris
- 3) Ibid., p. 43
- 4) Ibid., p. 43
- 5) Ibid., p. 43
- 6) J.M. Perrin & G. Thibon : Simone Weil telle que nous l'avon connue, p. 133, 1967, Fayard, Paris
- 7) Simone Weil : Attente de Dieu, p. 98
- 8) Simone Weil : Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu, p. 122, 1962, Gallimard, Paris
- 9) Simone Weil : Attente de Dieu, p. 100
- 10) Ibid., p. 100
- 11) Simone Weil : La condition ouvrière, p. 342, 1951 Gallimard, Paris
- 12) Simone Weil : La connaissance surnaturelle, p. 287, 1950, Gallimard, Paris
- 13) Ibid., p.296
- 14) Simone Weil : Ecrits de Londres et dernières lettres, 「ロンドン論集と最後の手紙」(田辺・杉山訳) p. 74, 1969, 勁草書房, 東京
- 15) Simone Weil : Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu, p. 114
- 16) Simone Weil : La pesanteur et la grâce, p. 86, 1948, UNION GÉNÉRALE D'ÉDITIONS, Paris
- 17) Simone Weil : La condition ouvrière, p. 342
- 18) Simone Weil : Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu, p. 108
- 19) Simone Weil : Attente de Dieu, p. 103
- 20) Ibid., p. 105
- 21) Ibid., p. 108, p. 15
- 22) Simone Weil : La connaissance surnaturelle, p. 297
- 23) Simone Weil : La condition ouvrière, p. 337
- 24) Simone Weil : Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu, p. 118
- 25) Ibid., p. 120
- 26) シモーヌ・ヴェイユ：ロンドン論集と最後の手紙 (田辺・杉山訳), p. 39
- 27) Ibid., p. 39
- 28) Ibid., p. 11
- 29) Simone Weil : La pesanteur et la grâce, pp. 36-37
- 30) Ibid., p. 36
- 31) Ibid., p. 92,及び, 聖書マタイ伝, 27の46, 1969, 日本聖書協会
- 32) Simone Weil : La pesanteur et la grâce, pp. 36-37
- 33) Simone Weil : Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu, p. 128
- 34) シモーヌ・ヴェイユ：前キリスト教的直観 (中田・橋本訳), pp. 404-405, 1968, 春秋社, 東京
- 36) Simone Weil : Attente de Dieu, p. 112
- 37) Simone Weil : La pesanteur et la grâce, p. 20, p. 147
- 38) Ibid., p. 21
- 39) Simone Weil : La pesanteur et la grâce, p. 21
- 40) Simone Weil : Attente de Dieu, pp. 102-103
- 41) Ibid., pp. 106-107
- 42) 聖書, マタイ伝 26の39
- 43) Simone Weil : Attente de Dieu, pp. 120-121
- 44) Ibid., pp. 106-107
- 45) 聖書イザヤ書 53の5
- 46) Simone Weil : Pensées sans ordre concernant l'amour de Dieu, p. 124
- 47) San Juan de Cruz : Noche Oscura (Obras Completas)p. 318, 1974, La Editorial Catolica, Madrid.